

研究主題

未来を創る豊かな学びの探究～教科を中心に育む資質・能力～

(2年次)

<研究構想図>

学校教育目標

健康かつ明朗で、豊かな知性と誠実な社会性を持ち、自主的で実践力のある生徒を育てる

前研究とのつながり

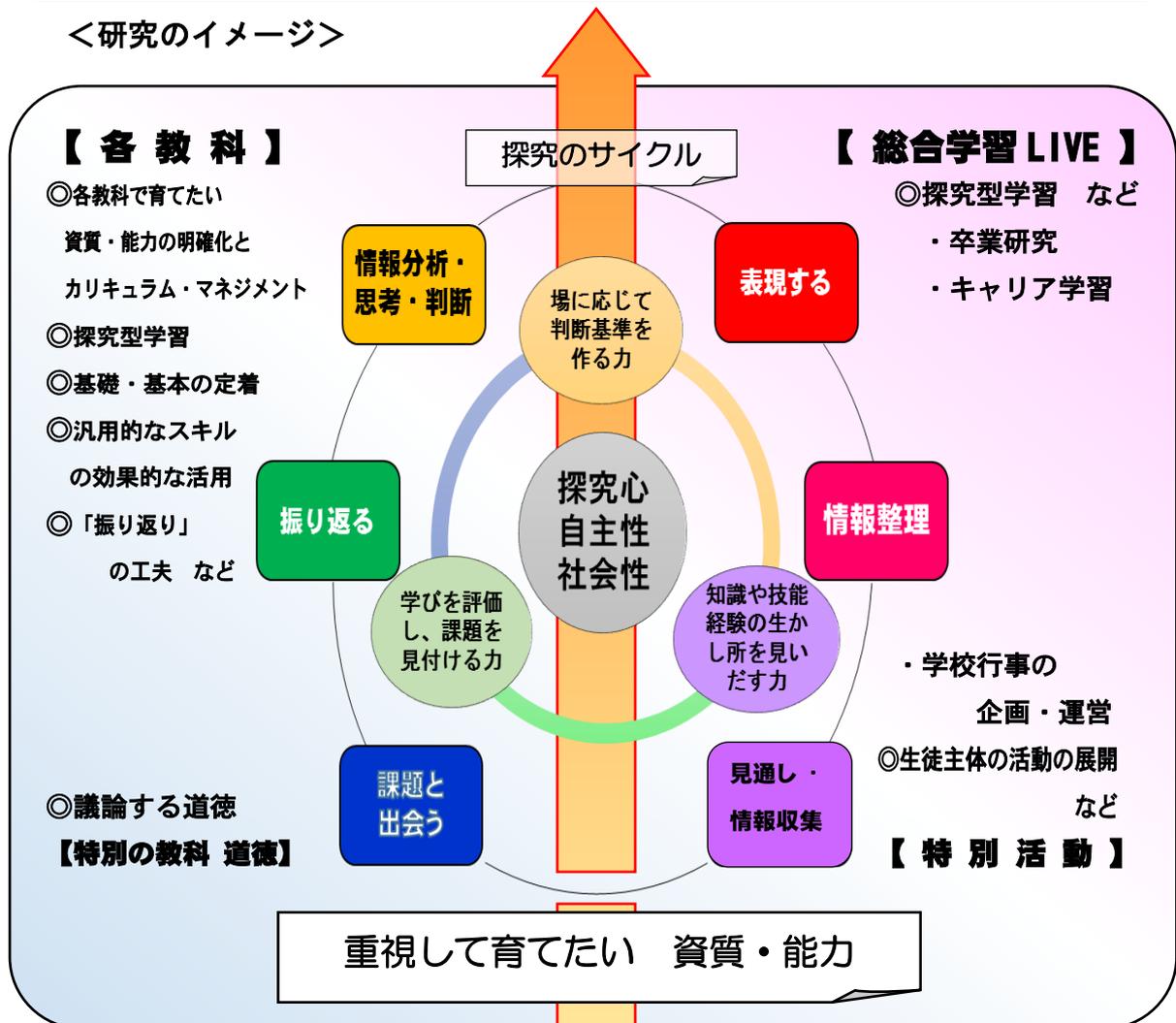
生徒の実態

教育的な課題、社会情勢

本研究で目指す生徒像

学びの意味を実感し、よりよいものを求めて探究し続ける生徒

<研究のイメージ>



生徒の実態把握、教材研究、カリキュラム・マネジメント

I. 主題設定の経緯

1. 学校教育目標

本校の学校教育目標は「健康かつ明朗で、豊かな知性と誠実な社会性を持ち、自主的で実践力のある生徒を育てる」である。この目標は、時代に左右されない普遍的な学校教育の姿勢を示している。この教育目標を具現化すべく、私たちは、より質の高い授業づくりを行い、生徒一人一人が充実した学校生活を送れるよう日々研鑽に努めている。

2. 前研究の成果と課題

学校教育目標を踏まえて、前研究では、主題「対話力をみがき、実践力を高める授業のあり方」のもと、『対話』を通じて得た気付きをもとに、より高い学びを追究できる生徒」の育成を目指して、4年間の研究に取り組んできた。対話の質を高めることと、より高い学びを追究することが、双方向の作用として連続的に発展し、知的好奇心や学んだことをもとに自ら取り組む力、ひいては生活の中で発揮される実践力を高めることにつながると考え、効果的な教材開発と課題の設定、学習材や他者の考え、自己との対話のコーディネートなどに力を入れた。その結果、教師が、教科や単元、授業を通じて育てたい生徒の姿を、より具体的にイメージするようになった。また、思考の深まりにつながる、質の高い対話が期待できるものか、という視点に立って、学習課題や教材、そして手立てを吟味する姿勢が、教師の中に生まれた。その結果、生徒同士のやりとりや、再思考の場面が次第に増え、対話の内容も、より深い思考を伴ったものへと変化し、対立を乗り越えて合意形成する達成感や、対話への自信、対話する楽しさを口にする生徒も出てきた。さらに、課題解決に伴って、対話する必要があるのか、必要だとすれば、何と、あるいは誰と対話すればよいか、などを考えて行動する生徒が増えた。対話する意味を生徒自身が自覚するようになり、授業以外の場においても深い対話が行われるようになった。

しかし、学んだことを他教科や実生活へと生かすことにはまだ課題が残った。これは、「この学びは自他の生活や未来にどのような意味を持つのか」という学びの意義、学びのつながりを、生徒自身がなかなか自覚できないためだと考えている。また、自分の考えを何度も練り直したり、他者の考えをよく吟味したりという、よりよいものを追究する姿勢にも課題を感じた。より主体的に新たな学びを求める生徒を育成するためには、思考、判断、表現を繰り返すことでよりよい解決にたどり着くような課題の設定をこれまで以上に重視し、学ぶ楽しさや喜びを感じられるような実践を行っていかねばならないと感じた。本校の教育目標にもあるように、知的好奇心に沿って質の高い学びを追究する“探究心あふれる生徒”を育てていきたいと考えている。

3. 昨今の教育的な課題

21世紀の社会は知識基盤社会であり、新しい知識・情報・技術が、社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増している。加えて知識・情報・技術をめぐる変化の早さが加速度的となり、情報化やグローバル化といった社会的変化が、人間の予測を超えて進展するようになってきている。情報技術の飛躍的な進化等を背景として、経済や文化など社会のあらゆる分野でのつながりが国境や地域を越えて活性化し、多様な人々や地域同士のつながりがますます緊密さを増している今、変化の激しい社会を生きるために必要な資質・能力とは何かを明確にし、教科等を学ぶ本質的な意義を大切にしつつ、教科等横断的な視点も持って育成を目指していくこと、社会とのつながりを重視しながら学校の特色づくりを図っていくこと、現実の社会との関わりの中で子供たち一人一人の豊かな学びを実現していく必要性が示されてきた。

そのため、「何ができるようになるのか」という観点から、育成を目指す資質・能力を整理することや、教科等を学ぶ意義、教科等間のつながりを踏まえ、整理された資質・能力を育成するために「何を学ぶか」について必要な指導内容等を検討すること、また、アクティブラーニングの視点から、その内容を「どのように学ぶか」という学びの質を重視し、主体的で対話的な深い学びの実現に向けて改善を図っていくことが求められる。

II. 研究主題について

本研究では、各教科で「何ができるようにするための学習なのか」という視点に立って各教科の存在意義を問い返ししながら、子どもたちが、変化の激しい未来を生きる社会の担い手となっていくために必要な資質・能力とはどんなものなのかを探り、教科特有のものと、他教科との共有化が図れるものを整理していく。また、全教科共通で重視して育む資質・能力として以下の4つを設定し、共通理解を図った上で研究を進める。

【学びに向かう意欲に関する資質・能力】

よりよいものを求める探究心や自主性、社会性

教科などの奥深さや面白さに触れることによって得られる喜びがあることや、学びそのものが自分や社会をよりよい方向に向かわせる力になることに気づき、自分の中に「学ぶ意味」を見いだすこと。

【学び方に関する資質・能力】

知識や技能、経験の生かし所を見いだす力

知識や技能、対話を含む、様々な課題解決スキルが、他の単元や教科、生活の課題解決場面にどう活用できるか見いだしたり、解決の見通しを立てて実際に活用したりすることができる力。

場に応じて判断基準をつくる力

目的や相手、場を的確かつ詳細にとらえ、判断の基準を適切に設定し、それに基づいて自他の考えや基準そのものを、より高次なものに練り上げることができる力。

学びを評価し、課題を見付ける力

知識や技能、学び方が、他の場面での実践に生かされるようになったかを振り返り、そこから新たな課題を見いだすことができる力。

本研究は、各教科の実践検証を中心に進めるが、特別活動、総合的な学習の時間を、身に付けた資質・能力を発展・補充・統合し、発揮する場として位置づけている。

前研究の成果として、生徒の実態把握をきめ細やかに行うこと、その上で適切な教材を選び、徹底的な教材研究を行うこと、思考の深まりが生まれるような対話を適宜取り入れることが、知的好奇心を高めたり学びがいを持ったりすることにつながると分かった。この成果も生かしながら、授業実践、研究を進めていきたい。

Ⅲ. 目指す生徒像の設定

前研究の成果と課題と本校生徒の実態を分析した結果、次のような姿を目指して研究を進めることを共通理解した。

本研究で目指す生徒像

学びの意味を実感し、よりよいものを求めて探究し続ける生徒

「目指す生徒像」を各教科および道徳の視点でとらえなおしたものを次に記載する。

| | |
|-----|--|
| 国語科 | ・日本語がもつよさ・特性・価値や、伝え合う喜びを実感し、 目的・相手・場面 に応じてより豊かに、適切に言葉を 受け取ったり使ったり する生徒 |
| 社会科 | ・社会的事象を多角的にとらえ、民主主義を尊重し、よりよい社会を求めて、公正に意思決定できる生徒 |
| 数学科 | ・数学的活動で磨いた力を発揮して、様々な問題を 数学の舞台に乗せて 解決できる生徒 |
| 理科 | ・日常や自然における事物・現象を科学的にとらえ、試行錯誤しながら、よりよい課題解決をしようとする生徒 |

| | |
|--------|---|
| 音楽科 | ・音楽表現の豊かさを味わい、音や音楽の捉え方を広げることができる生徒 |
| 美術科 | ・創造活動の喜びを味わい、造形的視点を持って豊かに自己実現しているとする生徒 |
| 保健体育科 | ・運動や技能の課題に気づき、運動の喜びや楽しさを実感することで、生涯にわたって豊かなスポーツライフの実現を図ろうとする生徒 |
| 技術・家庭科 | ・社会の変化に主体的に対応し、進んで生活を工夫し創造する能力と実践的な態度を身に付けた生徒 |
| 英語科 | ・外国語を通じて、主体的に人や社会とかかわりを持ち、場面や目的、相手に応じて適切に伝え合う生徒 |
| 道徳 | ・道徳的価値について誠実に向き合い、物事を多面的・多角的に考えながら、人間としてのよりよい生き方・考え方を追究し続ける生徒 |

※赤字は2年次研究を進める中で改訂した部分

IV. 研究の方法と検証

本研究は、授業改善を中心とした実践研究である。各教科の特性を生かした教材・単元構成・学習課題・学習過程の開発等を行うが、「学びに向かう意欲」や「学び方」に関わる資質・能力を高める工夫などについては、共有化を図りながら、研究を進めていきたい。

検証については、アンケート調査等をもとにした生徒の実態把握による分析と授業実践における生徒の変容等をもとにした分析の両方で行いたいと考えている。

V. これまでの研究のあゆみ

1. 1年次（平成28年6月～平成29年5月）

本校の学校教育目標や前研究の成果と課題、昨今の教育的な課題、本校の生徒の実態をもとに研究の立ち上げを行った1年次の成果（◇）と課題（◆）としては、以下のようなことがあげられた。

◇各教科において「何ができるようにしたいのか」という観点で題材や教材、学習課題を吟味するとともに、学んだことがどう生かされるのかを意識して単元や授業づくりを行ったことで、既習の解き方や知識、見通しの立て方などを課題解決に生かす生徒が増えてきた。3月末に実施したアンケートでも、およそ9割の生徒が「過去に学んだことや、試した解決の方法を、他の教科や場面でも使うことがある。」と答えている。

◇前研究において、自己の成長を実感させたり、課題解決の過程や方法について、その妥当性や有用性を問い直したりするために、各教科のねらいに応じた様々な「振り返り」を活用してきた。1年次の研究では、新たな課題を見いだすための工夫として「振り返り」をさらに充実させる教科が増え、生徒に学びを通じた自己の変容を自覚させたり、生徒の学びの意欲を喚起・持続させたりといった成果が上がってきている。

◇◆多くの生徒が、自分の学習成果や作品等から「自分に対する物足りなさ」を感じている。特に、自分の状況と理想とするものの姿が見えやすい活動では顕著である。理想通りにできなかったのは、「時間が足りなかったから」だと感じている生徒が多い。これは、学習活動を経た生徒の内面的価値の成長ととらえることもできるが、今後は学習成果に対して満足することができるような時間の確保と単元構成の工夫を行っていくことで、この「物足りなさ」が次の学習や授業外での自主的な取り組みに生きるようにすることが課題である。

◆前研究での「対話」による学びの深まりを生かしながら、各教科の実践を共有し、複数教科共通で取り組んだほうが効果的な手立てや、教科の特性を生かすべき手立てを探っていく必要がある。特に、「ものの見方や考え方」にかかわる、短期間では実感しにくい部分を、どのように育成するかを考えていかなければならない。

◆「全ての教科で一人の生徒を育てる」という意識をより強く持ち、生徒の実態把握を丁寧に行うとともに、つけたい資質・能力が社会生活で発揮された姿や、そこに至るまでの見通しを具体的にイメージし、「学びのつながり」をより強く意識した単元や授業づくりを行っていく必要がある。

2. 2年次の主な授業研究実績

本研究1年次の学習指導研究協議会後、共通理解の場としての校内研究会・全体授業研究会・教科毎に研究を深める場としての教科部会・教科授業研究会を中心に、研究を進めてきた。なお、全体の共同研究者として山形大学学術研究院の三浦登志一教授、野口徹教授から具体的なご指導をいただいている。また、各教科の授業研究には県内の先生方に 助言者・研究協力者としてご協力いただいている。以下に主な授業研究の実績を示す。

〈2年次（平成29年6月～平成30年5月）〉

29年 6月 「平成29年度学習指導研究協議会」振り返り

7月 夏季研修会

- ・1年次研究のまとめと2年次研究の方向性の検討
- ・各教科で育てる資質・能力と目指す生徒像の再検討
- ・講話・演習

講師：白水 始 教授（東京大学 高大接続研究センター）

- 10月 全体授業研究会
 ○第1学年 社会科「アジア州」(大隅 一浩)
- 11月 全体授業研究会
 ○第1学年 技術科「材料と加工に関する技術」(金澤 彰裕)
 教科授業研究会
 ○第1学年 保健体育科「ソフトボール」(吉田 仁志)
 ○第2学年 保健体育科「ハードル走」(三澤 珠栄)
 ○第1学年 国語科「少年の日の思い出」(須賀 学)
 ○第2学年 国語科「平家物語」(大山 宏樹)
 ○第3学年 国語科「作られた『物語』を超えて」(武田 優実)
- 12月 全体授業研究会
 ○第2学年 数学科「図形の性質の調べ方」(齋藤 太一)
 ○第3学年 道徳「本当のやさしさとは」(武田 優実)
 ・講話・演習
 講師：白水 始 教授 (東京大学 高大接続研究センター)
 教科授業研究会
 ○第3学年 数学科「円」(福島 譲二)
 ○第2学年 社会科「東北地方」(武田 桂輔)
 第3学年 社会科「これからの経済と社会」(関東 朋之)
 ○第1学年 英語科「Power-up 9」(今野 怜)
 第2学年 英語科「賛成意見・反対意見を言おう」(武田 美奈)
 第3学年 英語科「即興型英語ディベートを目指して」
 (鈴木 孝司)
 ○第1学年 道徳「C-(12)遊園地のできごと」(大隅 一浩)
- 30年 1月 教科授業研究会
 ○第3学年 理科「科学技術と人間」(大沼 康平)
 ○第1学年 音楽科「篠笛の魅力に迫ろう」(渋谷 知宏)
- 2月 校内研修会
 ・カリキュラム・マネジメントに関わる研修会
 教科授業研究会
 ○第1学年 美術科「学年エンブレムをつくろう」(高嶋 裕也)
 ○第2学年 道徳「D-(19) (資料名 貫戸朋子さんの葛藤)」
 (武田 美奈)

3. 2年次の研究の成果（◇）と課題（◆）

2年次の成果（◇）と課題（◆）としては、以下のようなことがあげられた。

- ◇振り返りについて、教科の各単元・題材において、様々な工夫がなされた。例えば、常に「本時の学び」を蓄積する、「単元末レポート」の形でまとめる、ワークシートの「過程で立ち止まる」など、教科や分野に応じて多様な形式・タイミングで振り返りが効果的に活用されている。学習が進んだり、広がったりしていく際に、生徒自身がこれまでの「学習のプロセス」に目を向けるための一つの手立てとして機能してきている。
- ◇1年次の課題でもあった、より「学びのつながり」を意識した課題設定や、手立ての工夫をしてきたことで、各教科で学んだ知識や視点を、他の教科や場面で生かすことができるということに気付く生徒が増加している。特に3年次の総合的な学習の時間に行った、「卒業研究・卒業論文」の作成時に自覚する生徒が多かった。
- ◆1年生や2年生では、学習した後に新たな課題を見いだしたり、さらに高次なものを求めたりする姿、つまり学んだことや身に付けたことを、主体的に活用し、他の場面にも転用して課題解決を目指そうとする「意識の形成」については不十分さが残った。中学校の早い段階で生徒に実感を持たせることで、3年次の姿をさらに変容させることが可能だと感じている。